

育の力に依つて之を回復しようといふのでやつたのが平民大學である。それは一種の農業補習學校とも考へられるやうな性質を有つて居るけれども、そのみでなく一般的の修養もやることになつて居る。これは小學校を卒業した者を入學させることが原則になつて居る。それで多くは寄宿制度になつて居つて、極く僅少の費用で以て六ヶ月位其處に宿泊が出来るやうになつて居る、其處で教へることは丁抹の國語、丁抹の文學、丁抹の歴史の如きものを基にして丁抹魂を吹込み、それに附加へて農業、牧畜に關係した學科を加へて、一種の補習教育の意味を有たせるといふことになつて居る。初めは男子のために開かれたが、今は女子のためにもすることになつて居る。女子は三ヶ月乃至四月になつて居る處が多いやうであるが、多くの處では夏の間は女子を入れて、女子の學級が終つて、それが歸ると今度は男子を入れる、一の校舎で男と女を期節を變へてやつて居る。それが段々發達して來て、丁抹ばかりでなく瑞典、諾威に及び、獨逸、佛蘭西、亞米利

加でもそれに倣ふ者が多くなつて來て、段々世界的になり、而してそれが非常に効果があるやうに云はれて居つた。その種の學校は戰爭前に於て獨逸でも丁抹境に少しあつた。丁抹境のシレスウキック、ホルスタイン地方は以前丁抹の領地であつたために、住民が丁抹を慕つて居つて、その地方から青年が丁抹の平民大學に入學する。さうすると丁抹の平民大學は非常に強い國粹主義で固つて居るから、皆丁抹魂を貫つて歸る。それは獨逸の政策上困るからといふので、その地方にそれを倣つたものを設けて、丁抹の國粹主義に代るに獨逸の國粹主義を取つたものを拵へて置いたのである。所が大戰争の終末に近附くに隨つて、これを全國に擴めようといふ運動が起つた。それは前に述べた如く、獨逸では上流社會の入る學校と、下流社會の者の入る學校が區別されて居つたが、そのために上下の間に思想なり感情なりの疏通を缺いて居つた。而して戰爭が長引くに隨つて段々革命の兆が起つた。そこで要路に立つて居る人達は其の社會の上下の疎隔を緩和する手

段として、此の平民大學を起さうとして居つたのである。所がその事業が盛にならぬうちに革命になつた。革命後になると社會民主黨が勢力を得た。社會民主黨は元來平等主義を取つて居るのであるから、最初平民大學を獨逸に起さうとしたのは官僚派、軍閥派であるに拘はらず、其の事業を社會民主黨が引繼いで戦後特別に之を奨励したので、今は全國にそれが擴がりつゝあるのである。其のやり方は區々で統一されてゐないが、要するに、一般國民の間に年齢の差別を問はず、男女の別を問はず、國民全體に文化を普及させるとを目的として居るのである。それがために獨逸のプロイセンの政府は、處々に之に關する講習會を開き、平民大學の教師となる人のために講習會を開いたり何かして盛にやつて居る。それと同じやうに英吉利に於ても、亞米利加に於ても、戦争後一般の大人に對する通俗教育が非常に活氣を呈して來た。それで今日になつて見ると、教育なるものの範圍が非常に廣くなつて來て、教育は子供だけを目當にするのでなくして、大人を

も目當にするのである。人間の生活全體に互つて教育事業なるものが何等かの形で行はれることになつて來たために、今日では生活即教育、教育即生活であるといふことが事實の上に於て言ひ得られるやうな状態になつて來たのである。

第四章 其他重要なる二三の問題

第一節 衛生教育

これまで體育教育とか、或は養護といふやうな語が用ゐられて居つた、養護といふのは教育を受けるに差支へないやうに身體を養護するといふことである。養護といふ語を使ふと仕事が消極的に考へられるが、體育といふ語を使ふと普通吾々は、體操、遊戯競技等を主として考へるやうな癖が附いて居る。今日頻に用ゐられて居る衛生教育といふのは吾々は衛生教育と云つたり保健教育と云つたりするが、亞米利加人が頻に使つて居る語であつて、ヘルスエデュケーションといふ。

此の語は非常に範圍が廣くて、その中には傳染病豫防の事も含まれて居るし、體

育運動の事も含まれて居るが、尙それだけに止まらない、要するに、子供の健康を増進するために取る所の一切の教育的手段を包含されたものである。故に衛生上の知識を與へることも、健康を増進するために必要な習慣を増進することも含まれて居る、又それ等のものを行ふに必要な家庭學校の設備を改善することも含まれて居つて、非常に範圍の廣い語になつて居る。さういふことに依つて衛生に關する教育事業が統一的にも考へられることになると思ふ。その方面から如何なる事をやつて居るか、學校で行つて居る仕事を具體的に云へば、學校では種々の機會に、國語の中にも、修身の中にも、理科の中にも衛生に關する注意を與へて居るのであるが、それ等の事を十分に行ふといふことである。健康を増進するために必要な知識を與へる、それはこれまでもやつて居るわけであるが、なほそれを十分やらなければならぬ。殊に注意すべきは健康を増進するに必要な習慣を養ふといふことである。そのためにどういふことをやつて居るかといふと

毎朝ブラシを使つて齒を洗はなければならぬといふことを教へて、學校で子供に規則正しく齒磨を使はせることを教へたりして居る處もある。それから食事の前に手を洗ひ、口を洗ふとか、食事の後に口を洗ふやうなことを勵行させるとか、生水を飲まないやうな習慣を付けさせるとか、或は食事の時間を嚴格に守らせるとか、或は就寢時間と起床の時間を定めてそれを嚴重に守らせるやうなことも其の中に含まれて居る。此等を學校と家庭と聯絡してやることが一の仕事である。それから學校の設備その他を改良するといふ方から云へば、茲に一の大きな問題がある、子供の食事其ものを改良するといふことである。日本では注意を與へるだけであつて、直接に食事を與へるとはやつてゐないが、之を徹底的にやらうと思へば、少くとも晝飯は學校で與へるといふことになつて來る。學校で晝飯を與へる、其の方法は種々になつて居つて、金を取つたり、金を取らないでやつたり其の料理は女學校の割烹の授業と聯絡して、其の學校の製作品を廻はして貰つた

り、種々のことをやつて居るが、そのために使ふ金は何處でも可成り大きいものになつて居る。そこで問題は日本でも將來起つて來るであらうと思ふ。殊に處々で試みられて居るのは、學校に牛乳を用意して置いて、子供の體質に注意してそれを分けてやるといふこと、學校では食事は冷くなつて居るが、其の冷い食事の代りに暖い食事を學校で與へるといふやうなことをやつたり、さういふ事も問題になつて來る。尙進んでは體操なり競技なりを衛生的に組織してやるといふ大きな問題が茲に在るのである。體操なり、學校の運動、遊戯の如きものを衛生的に考へて自分で組織するといふことは、かなり難かしい問題であらうと思ふ。現在のところではまだ十分に學術化されてゐないかと思ふ。此頃亞米利加に於て頻に現れて來る議論を見ると、運動競技に對して、運動競技の獎勵家が多少疑問としてゐるのは、野球とか蹴球等を獎勵することが必ずしも國民全體の健康を増進することに有効に働いてゐないではないかといふことである。それは何故かといふ

と、競技を行ふために技術は進むが、平素に於て體力を増すことに注意が足りないではないか、殊に學校の寄宿舎の設備が十分衛生的になつて居らぬやうに思ふ衛生教育、保健教育といふ立脚地から見ると、運動競技を獎勵する他に仕事も澤山あるといつてゐる。運動競技が勝負に重きを置くといふことになると種々の弊害が生ずる。日本では漸く運動競技が盛になり掛けて居るのであるから、今からさういふ消極的の議論をすると發達を妨げることになると思ふが、亞米利加人の問題として居る點に就いては吾々も考へて置かなければならぬことであると思ふのである。偕てさういふ風に學校の體操なり競技を十分學術的に組織するといふことになればどうであるかと云ふと、どうしても醫學上の知識が必要である。現在に於て學校で體操をやつて居つて、その體操の方法は種々生理學上から考へたり、或は心理學上から考へて改良して行くやうになつて居るが、併し大體に於てまだ研究の餘地があると考へられるが、それ以上に切に缺陷を感ずるのは、今日

の運動競技なるものが、型が概括的に極められて居つて、子供の體質に合せて工夫するといふことが十分出来てゐないことである。體操でも澤山の子供を前に置いて號令を掛けてやらせることになつて居るが、個人々々の體格、體質に應じたやり方を執らなければならぬといふことである。さうなれば學校の教師の知識だけではいけない、是非校醫の助力に頼らなければならぬことになる。又普通の子供許りであれば簡單であるが、子供の中には種々の缺點を有つて居る者もある。或は筋肉が十分發達してゐないやうな者があつたり、或は胸廓の不釣合に狭い者があつたり、種々其の特殊の身體を有つて居る。それを矯正するには唯一様に體操をやらせるだけでなくして、特別に其體格に應じた所の方法を執らなければならぬ。それが一步進むと治療體操術といふことになつて來る。治療體操術は醫家が實際患者に對して講じて居ることと思ふ。例へば傷を受けて長く繃帯して居つた者で、後で手が十分伸びなかつた場合には特殊の運動をするやうに命ずるとか

胸の狭い者にはどうするとか、足の形が内側に彎曲して居る者にはどうするとか外側に彎曲して居る者にはどういふ體操をやらせるとか云ふやうな問題が起つて來る。そこで近頃起つて居る問題は、學校醫と體操教師が協力してやらなければならぬといふことである。協力といふことが一步進めば、同一人がやればどうであらうかといふ問題が考へられる。亞米利加にもさういふ議論があり、獨逸にも同様の議論が起つて、學校醫と教員を兼ねた者を養成する機關を設けようといふことである。其説に據ると、或る一の學校に體育衛生技師といふやうなものを養成する場所を設けて、其處では體操運動に關する種々の技術も授けるが、それと同時に、その基礎となるべき解剖學とか、生理學とか、衛生學の如き事を教へるばかりでなく、病理學、治療學等も或る程度まで教へて、略醫學上の知識技術に於ても開業醫となるだけの資格を與へるだけの者にして、さういふ人達を學校に附けてやる。而して學校では兒童の健康状態に常に注意して、治療もし、同時

に其の兒童の體質體格に應じた運動方法を講じて運動體操の指導もやる。斯うしたら宜くはないかといふ議論である。實行は餘程困難であらうが、一の方法であるかも知らぬ。一體小學校では普通の訓導が體操を教へて居るから問題にならぬが、中等學校以上の體操は適當の人を得るのに困難である。體操教師それ自身から云うても困難の事情がある。體操教師は四十を越えたと段々身體が固くなる、それと同時に平素運動をして居つた者が其の年齢になつて、腸胃が健康で食事も十分行けるといふことになる、段々肥滿して來て兩方相俟つて運動が不便になつて來て、中學校等で器械體操で放れ業をして見ようとしても出來ないから、下に立つて居つて型だけやつて見せて置いて、今やつた通りやつて見ると云ふやうなことになつて來る。さういふことになる、非常に體操教師は困難な位置に在る。斯ういふことも、今の學校醫と體操教師を兼ねた人があつたならば都合が宜からうと思ふ。

次に學校齒科醫の問題は諸外國では實現して居るが、日本でも運動はあるが餘りはかゝしく實行されない、これも必要な問題と思ふ。

次は學校看護婦であるが、學校醫は大抵何處の國でも一の學校に生徒の居る間詰切つて居るといふ譯に行かないから、學校の専屬の看護婦を置いて、學校醫の助手を勤めて、卒倒した者があるとか、負傷した者がある場合に應急療法が出来るやうにして、生徒の健康状態に就いて平素授業の間、運動遊戯の間に個人々々に特別に注意して居つて、若し全體に活氣がないやうだとか、顔色が蒼白で何か病氣の疑があるやうな時には、學校醫に報告するやうな仕事をやらせるやうにして居る。日本では少數それを置いて居る處があるやうだけれども、まだ普及といふ所まで行つてゐないが、さういふ者も段々必要であると思ふ。此の學校看護婦が同時に家庭訪問をやることになつて居る。紐育邊では暑中休暇になると學校が休になるから、その期間は貧民窟を廻つて乳兒の衛生の注意をすることになつて

居る。又兒童指導上の手助をして、病氣に罹つた者を發見すると、醫者に報告して治療を受けさせる。それから家庭に對して一般の育兒法を説いて聞かせる、學校が始まれば兒童の世話をするやうなことをやつて居るのであるが、さういふことが出来れば至極結構であると思ふ。

第二節 個別的教授及自發的學習

それから兒童の個別的取扱、兒童に依つてそれ／＼力の異つて居ることは明瞭の事實であるから、學校の教育法も其の個々に應じて個別的取扱ひをして行かなければならぬ。今日では學校の成績といふものが出来て居るから、總ての兒童を一樣に取扱ふやうになつて居る。それがために劣等兒は何處までも進むことが出来ない、優等兒は勉強しないことになるから、之を個別的にして、その力に應じて教育をするといふことが今日必要なる問題である。それと同時に自治的の訓育

をして、兒童自身に自分で勉強して行くといふことが必要である。茲には訓育と題したが、實は授業の上に於てもそれがある。學校の課業をするにも、教師から教へられるばかりでなく、兒童自身が自分で學習することが必要になつて來た。又個別的に出来る者は出来るやうに教へ、出来ない者は出来ない者のやうに教へることになれば、その必要上からも兒童自身が自分の工夫で學習することが加つて來なければならぬことになる。故に個別的の教授と自治的の訓練といふことは相俟つた問題である。さういふ二つの要求が今日の教育に著しく現れて來て居るのであるが、そのために如何なることが試みられて居るかといふと、一學年で區切を附けて進級させることを廢めて、半年で進級させることにすれば、落第の時に一年繰返さないで済むのであるから、これも一の方法であるが、尙短く三ヶ月位に區切りをして進級させる處もある、而して進む者はずん／＼進ませて、遅れて居る者はゆつくりやらせるといふ方法である。もう一の方法は、早く學科を仕

舞ふ學級の系統を一つ立て、置く、又ゆつくり進んで行く學級の系統を一方に立て、置いて、兒童の力に應じて甲の組に入れたり、乙の組に入れたり、始終學力の進歩を見て居つて組替へをする、一方は八學年の學科を六學年で終り、一方は九年或は十年で終るやうな風に立て、置いて、生徒の力を始終注意して居つて、甲の組に入れたり、乙の組に入れたりする、さうしてそれを始終入替をするといふ方法がある、これはそれ／＼細かな名前が附いて居るが、今は單に概括的に述べるに止めて置く。

次には分團式教授のことである、これは優等兒と劣等兒を分けてやるのであるが、一のクラスの中で一緒にやるが良いかどうかといふとは大なる問題である。別々にやると非常に仕事は樂になるが、出来ない組はそれがために段々悪くなつて来る、それで最初から分離した學級を造ることを避けて、一學級の中に於て優等生、中等生、劣等生と三に分けたり、四に分けたり、五に分けたりしてやつて

行くのである。さうすると丁度今日の複式學級でやつて居るやうに、時には甲分團の兒童を乙分團の兒童とは異つた仕事をやらせて居る處もあり、或は一樣にやつて居つて、練習問題等を出來る方の兒童に澤山やらせるやうなことをして居る處もあり、種々になつて居る。分團が一度定つたならば少くも一年間繼續してやる、それを固定分團式と云うて居る。又その時間によつて、出來た者に就いてはそれ以上の問題を與へるやうに始終移動させて居る分團もある、これは移動分團式とも云ふべきものである。或は又或る處までは一樣に共通の授業をして置いてそれから出來る者と出來ない者とを區別して學級を組織し、出來る者のためには相當進んだ問題をやらせ、或は同じ程度でも澤山の練習をやらせるといふこともある。これ等の方法は何處の學校でも取かゝり易い方法で、斯の如き方法は處々で試みられて居る。それから一學級に二人の教師を置いて授業をやらせる方法もある。それはどうしてやるかと云へば、一人の教師は教壇に立つて教へ、一人の

教師は生徒の机の間を始終廻つて居つて、各兒童に就いて必要な注意を與へて居る。例へば先生の言葉が足りなくて間違つて居れば、それを注意して直させるやうにする。バタビヤプランと稱するのはそれであつて、さういふ風な種々なやり方は何處の國でもあつて、その種類は列擧することが出来ないほどであるが、その多くは亞米利加に現はれて居る。亞米利加は種々の新しい事をやるに都合の好いやうに社會の状態がなつて居るから、それで亞米利加に一番多いのである。所が今日ではどの方法を見ても、此の方法が一番成績が良いといふことに大體學界の輿論が認めて居るといふやうな方法はまだないので、二三年やつて見たが何かの故障があつて止めた、成績は好いやうであるが經費がかゝり過ぎて實行することが出来なかつたといふやうなことが多い。醫學の方では或る新藥を動物試験をして、治療の上にも用ゐて、それが非常に都合が好い、効果が多いと云うて、學界で認められて普通に行はれる様子であるが、教育の方はまだその程度まで行

つて居る方法は殆どないと云うても宜いのであつて、將來に於て大に研究を要する問題である。

最近に於て同じやうに一方は兒童を個別的に取扱つて行くといふ必要から起り一方は兒童自身に活動させるといふことを眼中に置いて工夫をしたものがある。其の一は亞米利加で頻に云つて居る所のプロジェクトメソッドと稱するものである。これは餘り適當の譯語はないが、自分共の教室では構案教授と云うてゐる。それは如何なることをやるのであるかと云ふと、種々の學科を教へるに、成るべく具體的な、さうして兒童の生活に於て近い實用的の意味を有つて居るやうな問題を兒童に與へて、その問題を調べるに必要な材料を學校で用意して置いて、その兒童が其の材料を利用して調べて來る、而して學校の教室に於て調べて來た兒童に發表させる。而も其の全體の問題を分割して、或る部分は甲の兒童がやり、或る部分は乙の兒童がやるといふことにして、兒童が互に質問したり、討論をし

たりする。その質問討論の間に、教師は必要に応じて注意を與へて行く、而して全體の質問なり討論を都合好く指導して、終りには兒童自身が調べて來たものが一つになつて確な結論を下せるやうにして行く教授法である。それが頻に亞米利加で唱へられて日本にも入つて來たのであるが、これに就て種々の疑問がある。極端に此の方法を主張して居る人は、何れの學科に於ても此の方法は用ゐられると云うて居る。又或る人は或る學科を教へるには徹頭徹尾此の方法を採つて、全體の學科を幾つかの小問題に碎いて、此の方法でやつて行くことに依つて全體の教授が行はれるといふ風に考へて居る。吾々の考ではそれは餘り極端で、學科の性質に依つては此の方法を採ることが適當であることもあり、又適當でないこともあると思ふ。それで或る場合には之を採つて用ゐることが宜いが、或る場合には之を用ゐて不都合のこともある。又全體の教授を之に依つてやつて行くことは困難であつて、普通の授業の間に特殊の授業としてやるのが良いと考へるのである。

る。

もう一つは近頃流行して居るドルトンプランと云ふものである。是は個別的に教授するといふと、兒童自身を活動させるといふとであるが、兒童自身が活動するのでも個々別々で活動するのではなくして、甲乙丙丁の行動が合して或る一の意味のあるものになる、さういふ種々の考を込めてやつて居る一の方法である。その方法は學校の中に科目毎に種々の研究室を置き、その部屋は歴史の研究室、この部屋は地理の研究室、この部屋は理科の研究室といふやうにしてある、さういふ風に各室に分けられない場合は一の部屋で此方の隅は地理、彼方の隅は歴史といふやうにして、戸棚なり机なりを備へて置いて、而して授業は一方には共通の授業をして、普通の學校のやうに時間割を定めて、全體の兒童を集めて教へる時間も設けてあるが、その他の時間は兒童を全く開放して活動させる。それには各教科目に此週にはこれだけの仕事をやる、此週にはこれだけの仕事をすると

ふ風に定めて、児童がやる時には研究室に行つてやるが、この時間にはこの事をやれといふことは定めなくて、児童の好きなことをやつて宜いのである。さうして児童は一週間にやれといふことは一週間に仕上げなければならぬが、どの時間にどれをやるといふことは限らない、児童は其處に行つて自分が歴史をやらうと思へば参考書を引出したり、歴史地圖を引出したり、年表を出したり、歴史の繪本を見たりして、而かもお互に相談をし合ひ、助力し合つて、與へられた問題を解くやうにする。而して皆集められた時に於て、教師が各児童の調べて來た事を調べて、それを整理して纏めるといふ風にやつて行くのである。さういふ風に或時間には解放して勝手にやらせる、或時間には教室で整理して纏りを附ける。亞米利加のドルトンといふ處で始まつて、それが餘り世間に評判にならないで居つたのを、英吉利の人がその國に持つて歸つてやり始め、英吉利で一昨年の終頃から昨年に亙つて流行し始めたのであるが、それが日本にも來て處々で試みられて居

る。それは面白い方法であつて、それが旨く行けば看ものであると思ふ。理論上非難すべきものではないが、之をやるには非常な困難があるといふことを心得て置かなければならぬ。學校の設備が第一にさういふ風になつてゐなければならぬ。學校に各學科の研究室を置くだけの餘地がなければならぬ。それと同時に集めて授業する場所がなければならぬ。殊に必要なものは児童自身が調べる参考品である。参考書なり、圖畫なり、寫真帳なり、年表なり、或は理科の方面であると實驗の設備等が十分に出來てゐないと實行することが出來ない。此のドルトンプランは種々の人が紹介した書物も出來て居るが、殊に澤柳博士の一行が歸朝されてから頻に流行し始めたのである。所で東京等で實行した所の話を聞くと、始めてからまだ一年位にしかならぬが、やり始めて止めた處もあちこちにある。それはどういふ所に缺點があつたかと云へば、初めは面白いと思つて始めるが、設備が十分出來てゐない、参考品や参考書等が澤山にない、此の方法をやると同じ事を

やる児童が少くも八人や十人はあると考へなければならぬ。さうすると種々の参考書を十種位宛は揃へなければならぬ。所が大抵の學校にはさういふ設備が出来てゐないから、そこから困難が起つて來たやうである。それから児童の習慣がその様に附いてゐないから、自發的に活動させることに可成り困難があると思ふ。これは高等程度の専門學校で常に困難を感じることであるが、生徒に成るべく活動させようといふので、自分の方で講義をしないで、これと同じやうな方法を探つてやつて見るがどうも旨く行かぬ。書物を讀ませると、殊に吾々の方では日本語の書物が少くて外國語の書物が多いのであるから、書物を讀ませて大體の意見を交換させると、結局は外國語の譯讀になつて教育學の時間にならぬことになつて了ふことが多いのである。又自分の方から問を出して意見を述べさせようとする、變な事を言つて笑はれると困ると思つてか、答へる者が少いといふことになつて、自發的にやらせることは困難である。小學校の児童は羞しがすることはな

いか知らぬが、まだ系統的の訓練が旨く出來て居らぬから、旨く行くとは考へられぬ。斯ういふ方法で學習するといふ習慣をつけることが骨が折れると思ふ。それには又年齢が相當進んで居らないといかぬと思ふ。ドルトンプランは中等程度で試みられた方法であつて、小學校にまで應用して、どの程度まで實行し得られるかは疑問であると自分は思ふ。今一つは此の方法を採つてやることになると、教師の方が餘程骨が折れる、これまでの方法であれば、問答法か何かでやれば宜いのであるが、此の方法であると児童自身が勝手に學習して居る事をそれ／＼に就いて、一人々々の特殊の問題に就いて、國語を持つて來たり、數學を持つて來たりするから、一々適當の指導を與へることにしなければならぬ。さうなると教師も大に訓練を要することと思ふ。それで自分は斯ういふ風に考へて居る。日本でやるには先づ設備が十分であるかどうか第一注意を拂はなければならぬ。十分でない所で始めたならば必ず失敗する。それから児童が自分で系統的に學修す

るといふ訓練をするためには餘程努力しなければならぬ。教師自身も亦努力しなければならぬ。兒童の年齢も眼中に置かなければならぬ。學科の性質も眼中に置いてやらなければならぬ。機械的の練習を主としてやるやうな學科であつたならば、此の方法は大分意味が異つて来る。先頃或る人から聞いた話であるが、これはプロジェクトメソッドやドルトンプランから出た試みであつたと思ふが、或る地方の高等女學校で國語の教師が幾種かの教科書を紹介して、生徒に向つて、「此中何でも宜しいから一を取つて自分で調べてお出なさい、その調べた所はちやんとノートに書いてお出なさい」と云つて、ノートブックに書いてある所を自分が見て、調べが附いて居るかどうかを検査して見ることにした。然るにある一女生徒は「つれづれ草」を選んで、何か一人でやつて學校に出すと、甲とか美とか上といふ標語を附けて返されて居つたさうであるが、家庭の人は最初は餘り注意して居らなかつた。或る時その人が「何をやつて居るか」「つれづれ草を調べて居りま

す」と云ふ、本を取つて所々尋ねて見ると答へられない、この本にはどういふことが書いてあるかと聞いてもそれも答へられない、それでも學校の成績を見ると甲とか美とか上とか附いて來て居る。能く調べて見ると、徒然草の註釋書を買つて來て、本文は讀まないで、欄外の註釋ばかり見て、それをづつと機械的に寫して學校に出して居つたので、それであるから中にどんなことが書いてあるかといふことは知らないが、點だけは良くなつて居つたといふことである。それであるから斯ういふ方法を迂濶にやると斯ういふことにもなる、餘程考へないと僅な缺陷から大きな弊害を生じて來ることがあるから、それ等の點に就いても十分注意しなければならぬことと考へる。

大正十三年九月十日印刷
大正十三年九月十五日發行

『教育學概論』
定價金一圓八十錢

著者 春山作樹

東京市下谷區上野櫻木町十七番地

發行者 帝國學校衛生會

右代表者 三宅秀

東京市神田區表神保町三番地

印刷者 橋本恒之

東京市神田區表神保町三番地

印刷所 鐵右文館印刷所



不許複製

發賣元

右文館書店 株式會社

東京市神田區表神保町三番地

東京 番〇七五七四
替振 番六二四〇一 屋古名

株式會社 右文館名著案内

▼東京神田表神保町三
振替東京四七五七〇▲

帝國學校衛生會 行 文部省著作 競 走 指 針 定價金七十五錢 送料金十三錢

文部省學校衛生官 吉田章信著 運動生理衛生學 定價金二圓七十錢 書留送料金十八錢

文部省學校衛生課長 北 豐吉著 學校衛生概論 定價金三圓五十錢 書留送料金十八錢

商科大學豫科 佐藤 弘著 人文地理講話 定價金二圓也 書留送料金十五錢

東京帝大教授 深作安文著 外來思想と國民道德 定價金二圓四十錢 書留送料金十五錢

252

289

終

